
コタマ！

nanami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コタマ！

【Nコード】

N7825R

【作者名】

nanami

【あらすじ】

もしも小太郎がフェイトガールズのようにフェイトに拾われていたら。そして、フェイトの仲間になっていたら。そんなもしもの、小太郎とフェイトの友情物語。・・・になればいいな、と思ってます。

捏造設定満載です。原作が未完または原作設定をきちんと知らないところがあるなどの理由から、ちょこちょこ変なところがあると
思います。

大丈夫でしたら、どうぞ。よろしくお願いします。

序・白い子供（前書き）

私は文才がないです！

序：白い子供

捨て子やったから、親の顔は覚えてへん。

正直、“犬上小太郎”ゆう名前がホンマに親から貰ったもんなんかわからへん。俺は狗族言うやつのはーフらしいけど、母親と父親のどっちが狗族なんかもわからんし、愛されてたんかどうかさえ、わからへん。

なんや、わからへんことだらけや。自分のことやのになあ。

誕生日も知らんから、正確やないけど、多分三才くらいの頃。人間にも狗族にも馴染めんくて、住んでた狗族の里を追い出されるように出てきた。

それから二年ちよい、色々仕事をしてきた。ハーフやからガキでも普通の人間よりは強くて何とかやってこれた。

やる仕事を選んでる余裕なんかなかったし、見た目も一部普通やなかったから、魔法使いつてやつに追われたりもした。正義のなんちゃらって口上で、化け物やからって酷い目にあったりもした。

「……けほ、……うう……」

森の中、ボロボロの状態で、何人生振り返ってるんやろ。

今は何とか、隙見つけて狗神使って逃げてきたけど、あかん、足がもう動かん。

身体中痛いし。

俺が何した・・・、て、まあ、したんかもしれんけど。

できるだけ、悪どいのか人殺すような仕事は選ばんようにしてきた。仕事選べるほど俺は強くない、仕事選んでたら俺みたいなガキは生きていけんから、絶対に選ばんつてのは無理やけど、そんな仕事はほとんどしてへん。

流石にガキやからか、心底虫唾が走るような仕事はまだ依頼されたことないけど。もうちよい年取ってたら、してたかもしれん。誰も助けてなんてくれへん、1人で生きていくしかないんやから。

仕事で一緒になる兄ちゃんとか姉ちゃんの中には、たまに優しいしてくる人もおるけど、いつもそんな人がいるわけちゆうし、皆がそんな人達とちゃう。

誰も、助けてくれん。今だって、ボロボロやけど、俺に救いのヒーローはおらへん。

このままやと、俺、死ぬんかな。

苦しい。辛い。痛くてしゃあない。身体も心も。

「・・・いやや、」

死にたない。生きていたい。

そのためにも、早く逃げな。追ってきてるかもしれへん。

早く早く、早く逃げなあかんねん。足動け！

ざ、草をかき分ける音。
すう、と血の気が引いた。

「見つけたぞ、化け物め」

「だれ、が、ぐう、化け物や」

現れた男は杖を突きだし、そう言った。
何が化け物や。そういうお前の方が化け物みたいやんか。人にさんざ酷いことしくさりよって。

「正義のためだ。死ね、化け物」

言うてから、男は何かを唱え始める。
せめて、万全なら。呪文唱える暇なんてやらんと、倒せんくても最低逃げれたのに。身体が動かん。

強うなりたい。

1人で生きられるくらい。
独りで生きられるくらい。

「おれは、まだ」

生きていたい。

願いむなしく、呪文が唱え終わるうとした、その時。男の腹から手が出てきた。

「があっ」

びちゃ、

血が飛んだ。地面に、近くにいた俺に、生暖かくて鉄臭いそれがかかる。

出てきた手が抜けた。どうやら後ろから手で突き刺されたようだ、と後から理解する。

男が倒れ、見えたのは真っ白な子供だった。

「……こういうところは、魔法世界も此方も変わらないね」

倒れた男を一瞥し、俺を見て、子供は無表情にそう言った。何言ってるのか、ようわからん。

髪も肌も白い、真っ白な子供。年は俺より上みたいやけど、それでも、まだ子供や。

「大丈夫かい？」

そう聞かれたんが最後やった。
安心したんか、俺は意識を失った。

序：白い子供（後書き）

思い付いて書いてみました。

何となく、小太郎とフェイトの友情を見てみたかったです。勢いでやっちゃったわけです。

拙い文ですが、読んでくださりありがとうございます。

次回からは三人称にしようと思ってます。

それでは。

次回も読んで頂けると幸いです。

1:よくしく(前書き)

三人称に変えました。

1: よろしく

ある日の会話。

「なあ。何で俺を助けたん？」

「さあ、わからない」

利益も何も無い、自己満足ですらなさそうな行為。助けた理由を少年は持たなかった。いや、持つてはいたのかもしれない。ただ、自身でわかっていなかった。

自身が無い人形のような少年。

まるで、そうして自己を作っていくごととしているようだった。

それは、少年が頑張って前を向いて進んでいつているように感じられて。

だから、小太郎は少年と友達になろうと思ったのかもしれない。

小太郎がフェイトと名乗った真つ白な子供に助けられ、拾われてから数ヶ月。

フェイトの強さに小太郎は驚き憧れ、フェイトに手ほどきを願った。フェイトはそれを受け入れ、小太郎と情報収集の合間にだが修行をしていた。

組手が終り、ボコボコにされた身体の治療を行いつつ、小太郎はフェイトの言った一言を聞き返した。

「“こずもえんてれけいあ”？」

「コスモエンテレケイア“完全なる世界”。前に話したと思うけど」

「わすれた！」

「何となく予想はしてたよ」

少し前、フェイトは自身の所属する“完全なる世界”の名だけを教えていた。詳しい事は何も言っていないが。

その事を忘れたという小太郎。そのあっけらかんとした物言いをフェイトは特に気にしなかった。

フェイトは自分が魔法世界から来たのだという事も一応言っていた。小太郎は恐らく忘れているだろうが。

旧世界に来た理由は話していない。

フェイトが関西にいたのは、“黄昏の姫巫女”の情報を求めて探っ

ていたからだ。紅き翼のメンバーの1人が関西呪術協会の長である事から、何らかの情報がないかと関西に来ていた。

「詳しくは言わないけど。関西には僕の求めている者はいないみたいだね。一旦彼方、魔法世界に戻ろうかと思う。君はどうする?」

「どうするって? そんなんきまってるやん。俺はフェイトについてく。そのままほーせかいとやらに一緒に行く」

当たり前であるかのように小太郎は言った。

「フェイトは俺の友達や。何やくわしいことは知らんけど、友達なんやから助けたになりたい。やから、ついてく」

「友達・・・? 君と僕が?」

「俺はそう思つとる。・・・めいわくか?」

「わからない」

不安げに聞いてくる小太郎にフェイトは首をふる。

わからない。理解できない。そう素直に答える。

フェイトはここ数ヶ月今のように、小太郎の言葉に態度に度々困惑した。

「めいわくやないんやったら、ええやん。俺とフェイトは友達な！」

「わかった。僕と君は友達だ」

小太郎は嬉しげに笑う。友人など初めて出来た者同士、何処か可笑しかったが微笑ましくもある光景だった。

「で、や。俺はついてくで」

「君は魔法世界が何処かも知らないだろう？」

「それでもついてく。フェイトがすることが俺のやりたないようなことやないんなら俺はフェイトを手伝いたい。どうするって聞いたんや、ついてつてもええってことやろ？」

「確かに、そうだね。どうするかを君は選べる。そして選んだ・・・
・どうしてだろう、さっきから妙な気分だ」

「ええっ！ 大丈夫なん!？」

「大丈夫。むしろ・・・いや何でもない。・・・いいよ、教えよう。
僕達の目的を」

“完全なる世界”の目的。

近い未来、確実にくる魔法世界の消滅から世界を救うその方法。

フェイトは話した。

隠しだては何一つせず、自分達が正義だとは一言も言わず、むしろ悪であるように語った。

「これが僕達の望み、悲願であり、叶えようとしている事だよ」

「.....」

「それでも君は僕に付いてくるかい？」

「おう、ついてくー！」

小太郎はきつぱりと言いきった。悩むように眉間にしわを寄せていたが、それでも決めた。覚悟をした。

小太郎は笑って、フェイトの右手を掴み握手をする。これから、よろしく。これからも、よろしく。そう言うように繋いだ手をふる。

「ありがとう」

気づけば、フェイトは意識せずにそう言っていた。

「おうー！」

小太郎はフェイトの言葉に笑みを深めた。嬉しそうに嬉しそうに、

笑った。

1：よろしく（後書き）

需要あるのか不明なお話ですが、ちまちま書いていきます。

・・・ちなみにヒロインは水の子か、フェイトガールズの誰かにしようと思っています。

まだ決まってません。どうしよう。

とりあえず、置いていきます。

読んでくださりありがとうございました。

2…のぞみ

ある日の会話。

「ええやん。むずかしい考えんでも」

崩れた建物を燃やしていく炎を遠目に2人は見ていた。

逃げることにすら出来ずに茫然とする子供を見つけて、小太郎は助け
たかった。フェイトも同じだろう、と小太郎は思う。フェイト自身
が気づいていなくとも思っではいるはずだ。

「結局は消えるんだ。今助かっても最終的には、彼らも彼女らも」

「よーわからんけど。それは助けたらあかん理由になるんか？」

「……」

「「ごちゃごちゃ考えんでええやん。助けたいから助ける、それでええやろ？」

「……そうだね、小太郎くん」

小太郎の言葉を肯定し、フェイトは子供を助けようと足を動かした。

何処と無く笑みの浮かんだ顔に、やはりフェイトも助けたかったんじゃないかと小太郎は思った。

魔法世界。

そこに来てから暫くは、“完全なる世界”のアジトとでも言う場所
にいてたが、今、フェイトと小太郎は魔法世界を旅している。行く
ところは基本、未だ大戦の傷跡が癒えぬ地域だったり、紛争地域だ
ったり、何かときな臭いところだ。

途中、戦争の生き残りを見つけると、助けて魔法学校や都市部に保
護されるように工作した。

今はそうして助けた中の1人が、フェイト達の手伝いをしたいと着
いてきている。

ルーナという名前を栞と改めた5歳の少女。小太郎より1つ年下だ。
フェイトと小太郎、栞の3人は紛争が終わった村へと足を踏み入れ
た。

「この村で生き残ってんのは……、」

「……間違いないのかい？」

「分身体で他のところも一通り見てきたんや、多分、間違いない」

「そう。……運が良かったね、いや、悪かったのかな？」

あたりは瓦礫だらけ。残り火が、なおもあたりを燃やしていく。空
氣中に煤が舞っていた。

その中に1人座り込む長い髪を2つくりにした少女。辺りを探し
歩いて、ようやく見つけた生き残り。

服は血や土などで汚れ、擦り傷などの小さいものが多いがいたると
ころに怪我をしている。特に左目の怪我が酷いのか手で押さええてい
た。

「……僕達と来るかい？」

「……」

「返事は後でええよ。先にケガの手当せな」

「そうだね、怪我を手当てして、ご両親を弔った後でいいよ。手伝
おう」

少女は見える方の目から涙を流していた。

簡易的に作った救護室。

テントの中で少女は眠る。栞が少女の様子を見ながら、時折頭に乗せたタオルを変えていた。

「フェイト、どないや？」

「処置は終わったよ。今は寝ている。片目はもう見えないだろうね」

「そうか・・・」

もう一度村の中の確認に出ていってから帰ってきた小太郎がテントの外にいたフェイトに聞いた。

答えに、やはりとは思うものの、小太郎は表情を苦々しげに歪めた。

「そっちはどうだったんだい？」

「やっぱり、あかん。生きとる奴は見あたらんかった。どっかに逃げとる言つわけでもなさそうや」

「・・・そう」

ただ1人生き残った少女。

これまで助ける事が出来た人達の中には、同じような人もいる。フ
エイト達は存在を知られてはならないので、おおっぴらに動けない。
大抵は多くとも数人で何十人と一気に助けられる事の方が稀だ。
助けた中には、何故助けた、何故皆と一緒に死なせてくれなかった、
と泣き詰め寄る人もいた。

「なあ、フエイト」

「何だい？」

「ほんまに・・・、ほんまに、アレが成功したら、こんな世界変え
られるんか？」

魔法世界は、小太郎にとっては、外国のようなもので故郷ではない。
小太郎は現実世界出身だ。

此方の世界が変わっても、現実世界が変わるわけではないと知って
いる。多少は影響を受けても、世界は変わらず回るだろう。差別も
迫害もなくならない。

そう、小太郎は知っているのだ。だが、そんな事関係なく、フエイ
トの手伝いのためだけでなく、小太郎は此方の世界だけでも変えた
いと望んでいる。

その望みは小太郎からしてみれば、実は意外な思いだった。
確かに小太郎はきちんと正義感を持つ。目の前で襲われている人が

いれば助けようとするかもしれない。けれど、世界の何処かの見ず知らずの人間のために働こうと思うほどにお人好しではない。小太郎はそう自分で判断している。

表面的な性格からは意外な事に、小太郎はそれなりに物事を割り切る事が出来、それを自覚していたからである。

しかし、小太郎はまだ両手で足りる年の子供でしかない。完全に割り切れていなかった、という事なのだろう。

「変えてみせるさ。たとえ世界中から悪と言われようと、僕は悲願を叶える」

「・・・あほ、俺達やる。何、人の事忘れてんねん」

「ごめん。そうだったね。一緒に叶えよう。我が主と、そして今は僕自身の願いでもある、“世界救済”を」

そう、誰に悪と罵られようと。誰に間違っていると否定されようと。どんな犠牲を出そうと。

たとえ“正義の英雄”^{ヒーロー}と戦う事になろうと。

決めたのだから。

そう告げるフェイトに小太郎は頷いた。

2：のぞみ（後書き）

需要はあるんだろうか。とか思いつつ、まあいいやと続きを書いてみました。

フェイトガールズの拾われる順番ってどうなんですかね？
わからないので捏造です。

フェイトガールズ拾い編、やりたいのですが原作に全員出てきてないので、次からはもう全員揃ってると思います。
原作に色々出てきたら間に話を付け加えるかも。

あ、文章がおかしいところ有ると思うので、教えていただけたら嬉しいです。

それでは、読んでくださりありがとうございました。

3…しゅぎょう(前書き)

今回も捏造設定が出てきます。
原作にはない設定が多々あります。

3…しゅぎょう

ある日の会話。

「かげつかい？」

まだフェイトと小太郎がまだ現実世界の関西にいたころ。
フェイトの言葉に小太郎は首をかしげた。
はて、影使いとはなんだろう？

「俺、かげつかいなん？」

「多分、だけどね」

「へえ」

「影使いはレアスキルだから、僕には知識はあっても使えない。教えられることはそう多くない。君の狗神は影に属するものだ。君以外の狗族で同じように影を扱える者はいなかっただろう？」

「……そっぴや居れへんかった気がする？」

今だって十分幼いが、今よりも幼い頃しか狗族とは同じ里に暮らし

ていなかったのだ。仕事でたまに同族に出会ったがろくに覚えがない。

首を傾げる小太郎にそれ以上聞いても無駄と悟り、フェイトは何も言わなかった。

影使いというのはレアスキルである。

影というものは光が遮られ生じる黒い領域の事である。

光と反対の存在として見られる事もあり、影は闇と同じ属性のように扱われる場合がある。実際、闇の上級魔法には影から影への転移魔法がある。しかし、厳密に言えば、影は闇ではない。闇は光を拒絶し存在する存在だが、影は光によって生じる存在だからだ。闇は光を拒絶する、光は闇を拒絶する。

影は全ての属性に属さない存在であり、如何様にも形を変える実体の無いものである。

そういう影という実体の無いものに形を与え、顕在化させるから、影使いというものはレアスキルなのである。

ちなみに、影を扱うものならば、転移も含め上級魔法でも、普通の魔法使いより影使いの方が魔法を簡単に扱えたりする。あくまで比較したら、だが。

閑話休題

1年経つて、フェイト達は魔法世界を巡る旅をひとまず終えた。

助けた人達は増え、助けられなかった人達も増えた。

そして、フェイト達に付いてくる事を決めた者も増えた。総勢5人、全員が亜人だ。

今現在、5人組は小太郎と共にフェイトに師事し修行中だ。

フェイトはたまにデュナミスの命令でいなくなる。今日もいなかった。

午前中の筋トレなどの基礎訓練を終えた後、午後からは組み手か座学だ。

実は“火よ灯れ”などの初期魔法に限り、全員全属性を使えるようになっていいる。今はそれぞれの得意属性を鍛え中だ。小太郎のみ、魔法訓練ではなく、気や影使いの能力を鍛えているところだ。

そして、今日は組み手の日。

昼御飯とその後の休息後、組み手の時間。十分開けた空間に小太郎と猫耳少女は向かい合っていた。少し離れた位置に残り4人がいる。

「やあっ!」

掛け声と共に、猫耳の少女が小太郎へと向かっていく。亜人であり、獣人である少女　　暦の動きは中々早い。

「ほいっと」

「にゃー！」

けれど、小太郎とて混ざり者である。身体能力は高い。まっすぐに走ってきた暦を軽くかわしながら、足を出してひっかけた。ずべっ、と暦は派手に転げる。

少女達は鍛え始めて、強くなってきている。読心能力のある朧や豹族である暦、竜族である環、木精を従える調、火属性に特化し火の精霊化が出来る焰。と、素養は素晴らしい。

それでも少女達はまだフェイトには遠く及ばないし、フェイトに及ばない小太郎にもまだ及ばない。フェイトに及ばなくとも裏で仕事をしてきた小太郎だ。基礎からして違う。当然といえば当然である。

「一直線、素直すぎや。それやったら、たとえ嬢ちゃんが俺より早うても、避けれるで」

小太郎とて、基本、実直的というか、一直線な攻撃が多い。

小太郎自身の望む強さはそれでも負けない強さだが、その望みとは裏腹に小太郎は影使いというレアスキル、分身やちよつとした小技

など、どちらかというトリッキーな才能の持ち主である。
フェイトの言でそういう技も使用できるように修行を始めたが、まだ基本的な一直線の攻撃しかできない。多分、性格によるのだらう。

「力もいるけど、嬢ちゃんは早さメインに鍛えるんやから、あんま素直すぎるんはあかん。動きを予想できたら、避けるんは簡単言うわけやないけど、難しゅうない。早さが無意味になるで？」

「むう」

「まだまだだな」

「うぐ」

小太郎の言葉に暦は齒ぎしりする。近くで見ていた4人も悔しそうに顔を歪めていた。

何かトラウマでもあるのか、女性には滅多に攻撃できない小太郎にるくに、攻撃されないまま何時も何時も倒されるのだ。悔しくて仕方ない。

「俺かてまだまだやけど、嬢ちゃんらには負けへんよ」

暦が見つめる先、小太郎の影がゆらりと揺れた。

3・・・しゅぎょう(後書き)

影使いなどの設定は捏造です。こうだったらいいなあ、みたいなのも入ってます。あと、こうなのかな、と勝手に考えた設定とか。捏造とかご都合主義ばかりですが、ご容赦ください。

・・・なんか、最近のネギまはあれですね。フェイトの過去編とか出てきちゃってもうどうしよう・・・。

となりつつありますが。どうしようもないので、このままです。

遅筆で上手くない文ですが、読んでくださりありがとうございます。

4：つよく(前書き)

口調がよくわからない・・・。

4…つよく

ある日の会話。

午前中のトレーニングが終わり、皆で昼食をとっていた時。

「小太郎さん、どうかなさったんですか？」

「ん？」

「いえ、楽しそうだったので」

「いつも、楽しそうだけど。そんなにご飯が好きなのか？」

だから、何かあったのかと。そう尋ねた栞に、そういえばと焰が続いて尋ねた。

「おう、楽しいし好きやで」

そう言って小太郎は笑った。

「いつつも、1人やったから。こんな賑やかなん、楽しいじゃないんや」

多分、ずっとずっと楽しいままや。そう言って笑った。

「むー」

「どうした、暦」

「何かありましたか？」

体育座りをして頬を膨らませている暦に、不思議に思った環と調が尋ねた。

「……、あのね、環、調」

「何だ」

「何ですか？」

「私、ちゃんと強くなれてるのかな？」

何かを掴もうとするように曆は手を前に伸ばす。ぎゅ、と握ったところで、何も掴めない。

「比べたって、仕方ないってわかってる、けど、・・・今日だって、コタ君はフェイトさまについていった。私達はまだ無理なのに」

少しでも役に立ちたいと、手伝いたいとついてきた。けれど、本当にフェイトさまのお役に立てるのか。手伝いが出るのか。

「私達とコタローとは違う」

「わかってるっ！ でも、でも・・・」

半ば泣きそうになりながら、曆は叫ぶようにそう言った。

そう、わかってる。自分が抱えている気持ちはただの不安で、消せない不安に怯え、フェイトの役に立てている小太郎に嫉妬しているのだ。わかってる。

「・・・」

「暦の気持ちはわかります。私も環も、痛いくらいによくわかります。ねえ」

「ああ、よくわかる。私達はまだまだ弱い。強くなりたい、フェイト様のお役に立てるように」

座っている暦と視線を合わせようと、調は暦の前にしゃがんだ。顔を伏せてしまっている暦とは視線が合わないが、無理に合わせようとはしなかった。

「暦、私達は確かにまだ弱い。けど、小太郎さんも、きっと、私達が思うほど強くないんですよ」

「へ？」

「小太郎さんに何があつたのか私達は詳しく知りませんが、予想することはできません。予想でしかありませんけどね」

眠っていても些細な事で目をさます事や、賑やかな食事を楽しいと言った事、読み書きが上手く出来なかつた事や、ちよつとした怪我の場合には気づかないくらい痛み鈍くなっている事。一緒にいる内に知つたそんな事から、予想は出来る。きっと、当たっているだろう予想。

「小太郎さんは馬鹿みたいに前向きで明るくて、辛い事なんてないような人のようですけど、違つって、わかります」

「うん、」

「ああ、」

「それを感じさせないくらいに、小太郎さんは強い。けど、弱音を吐かない、吐けない、・・・頼り方を知らないくらいには弱いんです」

「よくわかんないんだけど」

「・・・そういう見方はありなのか？」

「ありますよ。だって、もう小太郎さんは1人じゃないんですよ？
なのに、それに気づいてないんです」

今まで誰にも頼らずに生きてきたから。1人で生きてきたから。それ以外の生き方が考えられない。それ以外の生き方をするのが怖い。

小太郎自身は、そんな事意識していないのかもしれないが。誰かと共にあるうとして、その誰かと共にいられなくなるかもしれない、そんな恐怖を知りたくないから。再び1人になったら、もう1人きりに耐えられないかもしれない、そんな不安を抱いているから。小太郎は逃げているところがある。

だから、友達が出来ても何処かぎこちないままで、仲間が出来ても、強がって頼ろうとしないのだ。

「私はフェイト様に助けられました。小太郎さんにも救われたんです。だから、」

だから、と調は口を開く。

決意がこもった、強い笑みを浮かべる。

「私は小太郎さんと一緒に強くなって、一緒にフェイト様のお役に立ちたいんです」

そうして、小太郎と対等でありたいのだと。

頼って、頼られて、そういう対等な仲間になりたいのだと、調は思いを口にした。

「うん、」

「ああ、そうだな」

小太郎と調と暦と環と焰と栞と、6人で一緒に強くなっていく。そう、3人で笑った。

4：つよく（後書き）

フェイパの口調わからない……。うう。

相変わらず捏造ばっかです。小太郎の過去については特に捏造されまくってます。

こんな感じでこれからも、ぽつぽつ書いていこうと思います。よければ、よろしくお願いします。

乱文失礼します。

読んでくださりありがとうございます！

5：むり（前書き）

注意です。

かなり、小太郎の過去や設定を捏造しています。

5：むり

ある日の会話。

まだ、幼い頃。

小太郎が狗族の里にいた頃。

「姉ちゃん、いっつもありがとうな」

小太郎はそう女性に言った。小太郎の両手いっぱい女性から渡された食料がある。

女性は小太郎と同じような黒い耳の生えた、小太郎と同じ混ざり者だ。いつも、ほとんど露出のない格好をしている。

小太郎は回りから、まるでいない者のように扱われていて、女性は小太郎程ではないが混ざり者^{ハイフ}として冷遇されている。

女性は小太郎と一緒にはいてくれないが、せめて食料だけでも、と小太郎に届けてくれているのだ。

小太郎が今まで生きていられたのは、この女性のおかげと言って過言ではない。

「堪忍な、小太郎」

辛そうに、小太郎にそう女性は言った。毎度言われる言葉に小太郎は特に何も思わなかった。生まれてきた頃から、この状況なのだ。小太郎の心は自身を守る為に、この状況が自分にとって“普通”だと認識しているのである。

こてり、首を傾げる小太郎に女性は悲しそうに表情を歪めた。これも毎度の事であった。

小太郎は少し、というかかなりの戦闘好きである。

だが、小太郎は相手が女性になると途端に戦う意欲がなくなってしまう。たとえ相手の方が強くとも女性であるというだけで、本気で戦えなくなってしまうのだ。

それは、明らか欠点である。弱点と言い換えても良い。

自覚しているのだが、小太郎は今のところどうにか克服は出来ていない。無意識の内にだが、克服する事を拒んでいるのだ。

組手が終わり、結局は自滅してしまった調が悔しげに小太郎を見ている。睨んでいる、に近い目付きだ。途中、危うい場面もあったのだが、小太郎は調に手も足も出さなかった。攻撃と言えるようなものは、魔法を相殺するのに行なったくらいで、調自身には少しもしなかった。

「小太郎さん、あなたは・・・っ」

憤ったように調は口を開く。

「あなたは、」

言葉に詰まる。言いたい事はあるのに、叫んでも伝えたい事があるのに、問いただしたい事があるのに、それを上手く言葉で表せられない。きよとん、と不思議そうにしている小太郎が、調にはかなり苛立たしい。

「な、何やねんな。急に」

「コタ君がいけないんでしょーが！」

「ぐうあっー！」

離れた位置にいた曆が凄まじい勢いで近づいてきて、小太郎に蹴りを入れた。小太郎は吹き飛ばされて壁にぶつかる。

「何で、にやんで、コタ君は本気で戦ってくれないの！そりゃあ、私は、私達は弱いかもしれにやいけど！そんなの酷いよっ・・・！！」

酷い、と興奮しすぎて、たまに“な”が“にや”になりつつ曆は言った。

悔しくてしかたない。だって、曆は知っている。対等でありたいと一緒に強くなりたいと、そう望む調の気持ちを知っている。曆だってそうだ。

対等でありたいし、一緒に強くなっていきたい。なのに、こんなにあんまりだ。手加減だけならば、強さに差があるから仕方ないかもしれないが、危うくてもどんなに厳しくても手も足も出さないなんて、そんなの手加減じゃないだろう。

崩れた壁に倒れかかって座ったような状態のまま、小太郎は曆を、調を、そして曆の少し後ろにいる残りの3人を見る。

皆が皆、怒っているような悲しんでいるような、複雑な表情をしている。

曆の言葉はきつと、皆が思っていた思いなのだろうと小太郎は理解する。今まで自分がしていたことが、彼女達にどういった思いを抱かせていたのか理解する。

「・・・そりゃな、悪かった。確かに嬢ちゃんらにとったら酷いぶじよくやるうな」

「そうです。いつも、いつも、悔しくて仕方ありませんでした」

そう調は言ったが、つい先程よりも、表情は穏やかになっていた。まだ怒りや悲しみは収まっていけないが、それでも、自分達の思いを肯定してくれた、そう思っただけ嬉しかった。

まだまだ、調達は弱い。手加減はされるかもしれないが、けれど、これからは、全くの攻撃無しだなんて事はないだろう。そう思っただけ喜んだ。

しかし、

「けど、あかん」

「へ・・・？」

ぐ、と力を込めて立ち上がり、小太郎は調達の喜びを否定するように口を開く。

「俺は嬢ちゃんらに攻撃なんてしいひんよ」

「にゃっ!」

「な、なんでっ!?!」

悪かった、そう謝ってくれたのに。
なのに、小太郎は無理だと首を振る。攻撃できないと、首を振る。
握った拳は力の入りすぎで小さく震えているのに、爪が食い込んで
血が滲んでいるのに、そんな自分の状態に小太郎は気づかぬままに、
否定する。

「やって、あかん。傷つけたら、あかん。やから、俺には無理や」

何を言いたいのか、調達にはわからない。少し瞳孔が開いていてい
る目は調達を映しているはずなのに、調達を見てはいない。
あかん、と繰り返す声は、何かに怯えるように震えていた。

5：むり（後書き）

あとがき、という名の言い訳。

小太郎の過去を捏造し、トラウマにしちゃった訳、理由です。

あの世界って、男女関係なく強い人は強いじゃないですか。

裏の世界で生きてきたのに、小太郎は相手が女性だと自分より強かろうが本気で戦えない。例えば修学旅行編の楓と戦ったときとか。何故か、と考えていたら、本気を出さないんじゃないやなくて出せないんじゃないかなあ、と思ったわけです。ある程度戦えるのは、時が流れてある程度は吹っ切れてて、でも完璧に克服できてないから、とか。面白いかなあと思いましたが、その設定になりました。

このお話で、今、攻撃すら無理なのはまだまだ全然吹っ切れてないからです。

以上、よくわからない、わかりづらい言い訳でした。

6：かわる(前書き)

無理矢理まとめた感が凄いです。
すみません。

6：かわる

ある日の会話。

「ねえちゃん・・・？」

「・・・・・・・・」

「ねえちゃん」

側にはいてくれないけれど。

ただ1人、小太郎に声をかけてくれる人だった。

手助けをしてくれる人だった。

笑いかけてくれる人だった。

名前を読んでくれる人だった。

初めて、

「ねえちゃんっ」

初めて、護りたいと願った人だった。

子供だろうが大人だろうが、女性が怪我をしている、その状態は小太郎にとって1番の嫌な記憶と重なるのである。簡単に言ってしまう、トラウマ。自分が傷つけてしまうなど、最悪だ。恐怖。小太郎にとって、女性に攻撃をするというのは、どうしようもない恐怖なのである。

閑話休題。

「小太郎」

「え、ああ、何や、フェイト」

どうやら、ぼんやりしていたようだ、とフェイトに名を呼ばれ小太郎は気付いた。

あれから小太郎は結局、何の解決もないままにフェイトと共にある場所に来ていた。かつて、メガロメセンブリアの研究施設だった場所。

いつ嗅ぎつけてきた魔法使い達と戦闘が始まるかわからない。まあ、そんな事はそうないのだが、警戒は常にしておくべきだろう。

これではいけない、と小太郎は思考を切り換えようとするが、調達との事を思い出して中々上手くいかない。頭の中で、“姉ちゃん”と彼女達とが交互に巡る。こんな風になった事、今までなかったのに。

「大丈夫かい？ 先日何かあったらしいけど」

「別に、大丈夫や」

「そうは見えないけどね」

そつぽを向く小太郎を一瞥し、フェイトは言う。

「・・・珍しいな、フェイトがそんなん聞いてくるん」

「そつかな」

僅かに不思議そうな表情のフェイト。

小太郎達以外にはわからないくらいの表情の変化だ。

「そつだね、うん、そつだ。きつと、これが・・・」

「？ 何がや？」

「小太郎、僕は君が心配なんだ」

心配、

その言葉に、小太郎は目を見開いてフェイトを見た。

「多分、この感覚はそうだと思う。君が心配なんだ。今の君は、いつもと違うから」

「・・・・・・・・」

「君は僕の友達なんだろう？ 心配することもあるさ」

まだ、よくわからない。わからない事の方が多いけれど、多分、この胸に感じる思いは勘違いや間違バグいではないはずだ。そう思えるようになったのは、小太郎達のおかげだろう、と頭の片隅でフェイトは思う。

「あー、もう、何やねん。嬢ちゃんらもフェイトも、そんなん言うキャラやったんかい」

「変わったのさ」

変わらないものなどない。良くも悪くも、全ては変わっていく。

「僕は変わった。多分、栞君たちもそうなんだ」

「・・・そんなん、フェイトのおかげやろ」

「それでもないさ。きっと、僕だけの影響じゃない。・・・僕も彼女達も変わったんだ。今度は君の番だろう?」

「・・・」

小太郎はフェイトに何も言えなかった。

気分が重い。

任務を終え、帰宅した小太郎は1人で、扉の前に立っていた。フェイトはデュナミスに任務の結果報告をしにいつている。

「・・・うう、入りづらあ」

中には、5人全員居るだろう。

数日間会わなかった分、余計に顔があわせづらい。うやむやのままこれ幸いと任務に行った小太郎の自業自得な所もあるかもしれない

が。

「・・・た、ただいま」

「」「」「」「・・・」「」「」

入った瞬間、向けられた眼差しに小太郎は固まる。殺気も敵意も籠つていないが、ひたすらに冷たい、気がした。少女達は固まったままの小太郎の傍に近づいた。小太郎は冷や汗だらだらである。

「小太郎さん」

ばちん

「へ」

調に名を呼べれると共に平手打ちを食らった。軽いもので痛くはないが驚く。驚いているうちに全員から軽く叩かれたり小突かれたりした。

痛くはないのだが、さすがに叩かれたりした所が赤くなる。

「今は、これで許してあげますわ。コタローさん」

「まあ、いろいろと話し合った上でこうなった。私達とて、触れら

れたくない部分もあるからな」

ふふ、と笑いながら言う栞に、ふん、と腕を組みそっぽを向きながら言う焰。

「それに、コタローの事、全然知らない。コタローもそう。私達の事全然知らない」

「だから、これから、知っていきこうって。いっぱい喧嘩して仲直りして、言いたい事は言い合って、って。そうなの」

「コタローはそう思っていないかもしれないが、私達はフェイト様とコタローのおかげで、今こうしていられているんだぞ」

環が言つて、続けてまだ少しばかり不満げな暦が言った。そして、そっぽを向いたまま、焰がまた口を開いた。

小太郎の真正面にいる調が、だから、と小太郎に語りかける。

「だから、今は、今はこれでいいです。これから、変わっていきましよう、一緒に、強くなっていきましよう」

『僕も彼女達も変わったんだ。今度は君の番だろう?』

調の言葉に、フェイトの言葉が、頭に浮かぶ。

「小太郎さん、返事は？」

「・・・ああ、わかったわ」

脳裏に過ぎる女性の姿があるのに、小太郎はそう頷いていた。嬉しそうに笑う少女達に、浮かぶ女性の姿が少しだが薄れる。

「ああ、言っの忘れてました」

「何や？」

「・・・・おかえりなさい」「」「」

全員笑って、小太郎にそういった。

「・・・なんやねん、みんなして」

顔を伏せて、小さく呟かれた言葉は誰にも届くことなく消えた。

泣きだしてしまいそうな気分だった。

6：かわる（後書き）

無理矢理感が凄いですね。すいません。文才欲しい・・・げふっ。
読んでくださりありがとうございます。

あ、そういえば実は名前の呼び方を全員変えています。

フェイト 小太郎

調 小太郎さん

暦 コタ君

栞 コタローさん

焰 コタロウ

環 コタロー・コタ

フェイトに呼び捨てをさせたかったのと判別させるためにこうなりました。

7：そして（前書き）

何だか、冒頭が段々長くなっていつている気がする作者です。原作軸に入ったら止めようかな？

まあ、それは置いておいて。

ヒロインは誰がいいかなと悩んでいます。

ちなみに今のところ、

小太郎ヒロイン 調、セクストウム

フェイトヒロイン 他のフェイパ

にしようかと思ってます。ですが、まだまだ悩んでいます。

いや、 はフェイトやネギより小太郎ヒロインの方がいいんじゃない？ という方はどうぞ意見ください。大変嬉しいです。

何だかすいません。長々と。

7：そして

後日談。

丸い机を囲むように小太郎達は座っていた。

「それでは、第1回チキチキ過去暴露大会を始めます！」

「せんせーい、私達は嘘偽りなく話す事をここに誓いまーす」

「って、何ですか、そのノリっ!？」

全力でふざける小太郎と環。いやもしかしたら天然かもしれない。そんな2人に突っ込む調。2人とフェイト以外はずっとこけていたりする。

「誰から話すんだい？ 僕はいつでもいいけど」

「じゃ。まず俺から。1番、犬上小太郎。実は俺が狗族の里を出たんは姉ちゃんみたいに思うとった人が殺され・・・死んだからです」

「っ、いきなりヘヴィー過ぎるだろ、コタロウ！」

「だから、コタは私達に攻撃出来ないのか？」

「おう。何や、攻撃する時に姉ちゃんの姿が過ってな」

「にやんで軽く流せてるのっ!？」

「えー、じゃあ次は私が。2番、栞です。実は私、読心能力のある一族出身でして、その能力故に一族が滅ぼされました」

「貴女もですか、栞いー!!」

「フェイト様は知ってますわよね？」

「うん」

「ふえ、ふえいとさまあっ!？」

ふざけたように軽く会話をする。軽口を交わすが、それはそのように話さなければ話せないからだ、と思う。多分、いやきつと、そうだ。ねっ。

前からの衝撃を受けて、調は尻餅をついた。
立ち上がる事もせず、調は前方を見る。

「小太郎さん、」

思わず名を読んだ。

小太郎は掌底を繰り広げた形で固まっていた。

「お、おれ」

「小太郎さんっ。やりましたね」

手を握りあつて喜ぶ2人のそばに、暦達がかけてやってきた。思い
思いに各自抱き合ったりハイタッチをしたりしている。ハイテンシ
ョンだ。

女の子が男の子に攻撃され喜ぶという、何も知らない人が見たら、
よくわからない光景である。

そんな光景を眺める人がいた。小さな1人用の机の上にコーヒーを
置き、飲んでいるフェイトと、フェイトの近くに立つデュナミスの
2人。

「やれやれ」

「フェイト、あれは何をやっておるのだ？」

「1歩前に進めた事を喜びあっているだけだよ」

「お前もか？」

「？」

「お前も、喜んでいるのか？」

「・・・さあね」

フェイトは答え、コーヒーを飲もうとカップを持った。
フェイトの口元は確かに弧を描いていた。

7：そして（後書き）

説明不足や描写不足が多くて申し訳ないです。すみません。

読んでくださりありがとうございます。

8…ろくばんめ(前書き)

ヒロイン案は原作軸に入るまで募集中です！

いつまで、って書いてなかったの。 (汗)

8・・・おはんめ

ある日の会話。

「何がどうしてこうなった」

「・・・・・・さあ？」

ゴゴゴゴ、幻覚かわからないが闇を背負うデュナミスから小太郎は必死に目をそらす。

デュナミスが見つめる先には少女が1人。

「6、“水”のアーウェンルクスを継承しました」

本来、まだ目覚める筈でなかった、少女が1人目覚めていた。

「そついや、嬢ちゃん、名前なんていうんや？」

数日前、起動させてしまった少女。急遽デュナミスが調整を行い、今日ようやく調整が終わった少女は微妙な顔をしたフェイトに連れられ小太郎と対面した。フェイトは何故だか少女と共に居たくないらしく、早々に何処かへと行ってしまった。残された2人はしばし突っ立ったまま静かに沈黙を保っていたが、ふいに小太郎が先程の問いを口にしたのである。少女は特に表情を動かすことなく、口を開く。

「セクストウム6番目です」

「いやいや、それは番号なんやろ？」

「そうですが、何か」

「やったら、それは嬢ちゃん自身の名前やないやんか。なあ、嬢ちゃん、名前なんていうんや？」

「テルティウム3番目の名乗る“フェイト”のような名の事を言っているのですら、私にはありません」

「うーん。じゃあ、名前決めようや。嬢ちゃんだけの」

「必要性がありません」

相変わらず無表情のままの少女。そんな事にせず小太郎は笑いかける。

「必要やって。嬢ちゃんは嬢ちゃんやねんから」

「貴方の考えは理解しかねます」

「あー、うー。とりあえず、必要なやつて！さ、決めようや」

そう笑い、小太郎は少女の白く細い手を握った。少女が低体温なのか、小太郎が高体温なのか、それとも、両方なのか。温度差がすぐにわかるほどであった。

手を握ったまま、小太郎は少女を連れて歩く。引っ張られながら、少女はついていく。

じんわりと、少しずつ、互いの体温が混じり合う。少女は小太郎の手を振りほどけないまま、温くなっていく自分の手を見つめた。不快ではない。伝わってくる体温が、何故だか手だけではなく、自分を暖めてくれているような気がする。初めて、触れた人の温度だからだろうか。少女は頭の中で自問するが答えは出なかった。

「嬢ちゃん、ついたで」

扉の前で止まる。

ここは小太郎達が主に使っている場所で、組手など訓練には使わないうが座学の時などや食事や自由時間などの普段の日常時に使う。端

には本棚など色々とあり、中央にはそれなりの大きさがある丸い机とその机用の椅子がある。

「おーい、焔、栞」

部屋の中で見つけた少女の名を呼ぶ。

小太郎がフェイトと出会って約2年半、少女5人が加わり、約1年の旅を終えてから、1年と少し。つまり、小太郎と少女達が出会って、早い者は2年近く経っている。だが、小太郎が少女達の名前を呼べるようになったのはトラウマである“姉ちゃん”の事を吹っ切ったからなので、まだ1年にも満たない。それでも、少しずつだが、確実に小太郎も変わっていく事が出来ている。

「ああ、コタロウ・・・、って、え？」

「どうかなさったんですか？」

「あれ、2人だけか？」

「ええ、他の皆さんはダイオラマ魔球の中ですわ。私達は食事当番ですのよ」

「え、あ、ちよ、」

「どないしたんや？」

にこにこと笑いながら栞は答える。

困惑した表情の焰は2人の会話を聞いてすらいらないようで、焰の視線は、小太郎と手を繋いだ少女に固まっていた。

「フェイト様は、おんなのこだったの catt! ?」

「んなわけある catt! 」

「~~~~! !」

ずべし、頭に手刀が入る。思ったよりも痛かったらしい、頭を抱える姿に小太郎はごめんと謝った。

「えっと、つまりはですね。小太郎さん」

「この女の子はフェイト様そっくりだが、」

「フェイト様じゃない、つて事?」

「吾輩は少女である。名前はまだない、というわけか」

「いや、そうやけど。なんか違えへんか、環」

かくかくしかじか、という説明の結果である。
小説って便利だね。

「で、や。名前決めようか」

「そ、そんなホイホイ決めていいものなんですか？」

「でも、このまんま、番号のままなんて嫌やんか」

それはそうだと、全員納得する。

そうときまれば、早かった。あれやこれやと言い合う。

やはり可愛らしい名前がいいのでは、と栞が聞いたり。フェイト様の妹なら、似たような名前の方がいいんじゃないか、と焔が言った。そんな感じであーでもないこーでもないと言い合う。

「・・・なぜ」

「えっ？」

「なぜ、よく知りもしない、私のために、こんな。時間の無駄です。鍛錬をしている方がよほど有意義でしょう」

少女の言葉にきよとん、と皆、目を見開いたり、首を傾げたりする。

「よく知らんのは当たり前やん。知り合うたばかりなんやし。俺ら
かて互いのこと、みいんな知つとるわけやないし」

「知らない事もまだまだありますわ」

「まだ知らない事は、これから知っていけばいいですしね」

「全然知らなくても、これから一緒にいるんならもう他人じゃなく
て仲間だしね」

目を見合わせながら、そうやよな、と小太郎達は言っていく。その
言葉は、少女に理解できるようなものではなかった。

理解不能、理解不能。

わからない。テルティウム3番目は、なぜ、彼らと引き合わせたのか。
自分達はただの人形でしかない。

彼らと共にあるから、3番目はヒトであろうとするのか。

「なあ、嬢ちゃん。名前、どないする？」

理解不能。わからない。

暖かい笑顔が、不快ではない。その理由が少女にはわからなかった。

8：ろくばんめ（後書き）

あとがきという名の言い訳。

セクストウムが起動しました。

そして、このお話ではセクストウムではなく、別の名前になります。
すみません。

今後の予定。

あともう少しで、とりあえず、原作前の魔法世界編の終わりです。
原作前の旧世界こと現実世界編がいくつか、で、原作の修学旅行編
に入りたいと思っております。

予定は未定なんですがね……。

読んでくださりありがとうございました！

間：人形（前書き）

幕間：人形であった少年と人形である少女。

間：人形

ごぼり、ごぼ。

液体が満たされたカプセルの中、1人の少女がいる。

予定になかった起動をした少女は外界で活動するにはまだ不十分な点が多く、それを無くすために調整を行っているのだ。

かつかつ。足音がして少女は目を開けた。

カプセルの前には、少女と似通った容姿の少年がいる。

ごぼり、ごぼ。

ごぼり、ごぼ。

理解不能。

理解不能。

なぜですか。私達はただの人形でしょう。

ただの、造物主^{マスター}の願望^{のぞみ}のための、手足、人形でしょう。

なのに、なぜ、そのようにヒトであろうとするのですか？

「人間であるかどうかは、関係ないよ」

・・・？

「半妖でも、獣である必要はない。問題は心のありようだから。僕は小太郎に、小太郎や朧くん達にあつて、そう知ったんだ」

・・・、しかし私達に心など。私達は、ただの、人を模した人形なのに。

「まったく、嫌になるくらい、君はかつての僕と同じだ。起動したばかりだから仕方がないのだろうけど、不快だね。君は、朧くん達を拾う前、小太郎を助ける前の僕。ただの人形であつたかつての僕だ」

私達はただの人形、それが正しい姿でしょう？

「さつきも言っただろう？ そんなの心の有り様次第だ」

・・・テルティウム3番目、貴方の考えは理解しかねます。

「その名で呼ばないでくれないか、僕はフェイトだ」

貴方は^{テルティウム}3番目でしょっ？

「わからないだろうね。これからどうなるか知らないが、少なくとも今の君には。僕は確かに^{テルティウム}3番目だけれど、それは僕の名前ではないんだよ」

・・・。

「本当に、予想通りに、君は人形だ」

それを確認しにきたのですか？

「まあ、そっだね」

ならば、もう用は済んだでしょう。早く出ていったらどうですか？

「・・・君でも不快に感じたりするんだね」

？何を言っているのですか？

「否、何でもない。ああ、でも最後に1つだけ」

何ですか？

「世界救済は造物主の悲願だけれど、僕にとってもそうなんだ。だから、僕は僕の願いを叶えるために、ここにいますのさ」

な・・・っ、

「・・・ああ、間違えた。僕“達”だった。また怒られる。・・・まあ、そういう事だから。じゃあね」

「ぼん、ぼん。

「ぼろぼろ、ぼろぼろ。」
「ぼろ、ぼろ。」

理解不能。
理解不能。

「ぼろ、ぼろ。」

間：人形（後書き）

あとがきという名の言い訳。

幕間話。

8話の間、調整中のお話でした。

8話で、セクストウムの感情が早めに芽生えかけていたのはこのやりとりがあったから。・・・という事にしておいて下さい。

読んでくださりありがとうございました！

9・・・じい（前書き）

注意。作中キャラであるセクストウムにオリジナルの名前がついていません。

ある日の会話。

「“好き”とは何ですか？」

首を傾げ、尋ねるセクストウムことフェリス。全員から妹分のように思われるようになった彼女の言葉に、調と暦、焰は顔を赤くして固まり、栞は何を思ってるのかわからない笑みを浮かべ、環は急に何だと首を傾げた。

「貴方達ならわかると考えました。好きとは何ですか」

「そ、それはだな、」

「ん〜と、」

「・・・」

顔を赤くさせ、言葉に詰まる3人を見て、彼女達は答えられないと判断したフェリスは栞と環を見た。

「・・・とりあえず、聞いてわかるようなものではないな」

「そうですね。残念ながら、私達では貴方が望むような答えは出来ませんわ」

「・・・、そうですね」

「はい。けれど、きっと、いつか。フェリスさんにもわかる日が来ますわ」

栞はフェリスの手をとり、そう微笑んだ。

座学の時間中。

もう大体の基礎的な勉強は終わっているし応用的なものは各自でやっている。滅多にしなくなっていたので、かなり久しぶりである。

フェリスが起動して大分経ったある日、外の任務にてたまたまだがフェリスには中途半端にしか常識がない事がわかったのだ。ある程度はあるので、発見が遅れたのだらう。調整をしたとはいえ、急場凌ぎ皆でしかなかったらしく、フェリスは戦闘的には十分なのだが、情緒面や知識面では不十分な部分があったのだ。

よって、フェリスに常識を教えるために、ついでに今の魔法世界の世界情勢を知るために、皆で集まって、久しぶりに座学の時間を作る事にした。

小太郎はうつらうつらと眠りそうなのを必死に眠らないように我慢しながら、話を聞いていた。眠ってしまったら、フェイトに超高速でチヨークを投げられるのだ。何の漫画、または小説を読んだのかは知らないが、必ず白いチヨークを投げってくる。かなり痛い。

1回、チヨークが粉塵化してからは手加減してくれてるみたいだが痛い。

ちなみに、恐らくだが、漫画の出所はデユナミスだろう。あれで、あの男は現実・魔法世界どちらのものでも漫画やラノベが好きだ。もしかしたら、フェイトやフェリスのモデルは・・・いや、容姿は造物主のデザインのはずだ。関係ないだろう。まさか、造物主が・・・否、そんな事はない。少年は神話になどならないさ、多分。うん。

「フェイト、質問をしても？」

「ああ、構わないよ」

似通った顔。淡々とした会話だが、まるで兄妹のようだ。

最初の頃は、何かとフェリスに思う所があったらしいフェイトだが、フェリスが人形としてではなくヒトとして成長し変わっていつている今は、そんな事はなく、普通に接するようになってる。

「私達のようなモノでも、仮契約は出来るのでしょうか？」

「……どうだろうね。出来なくはないと思うけど」

フェイトとフェリスは造物主によって、“作られた存在”である。しかし、暴論かもしれないが、究極的に言ってしまうえば、魔法世界の住人も“作られた存在”なのである。

魔法世界の住人として、仮契約は出来る。

フェイト達に出来ないとは言えない。

「仮に、出来るとしようか。したいのかい？」

「はい。アーティファクトが出れば、戦力的にも戦略的にも有利にはなれど不利にはならないでしょう？」

「ふむ。確かにそうだね」

頷いて、フェイトは試してみる価値はあるか、と考える。

従者と主人、ならばフェイトは主人の位置だろう。力量的に。

「フェイトと栞達、私と小太郎で仮契約しましょう」

「？ 従者の数は均等に分けなくていいのかい？」

「ええ、世間的には、仮契約は異性同士とするものなのでしょう？」

何やら可愛いピンクの表紙の本を手に持ちながらフェリスは言う。それに、そういえばそうかとフェイトは頷き納得する。

「なら、それでいいけど。方法は どうする？ 一番簡単な方法は、“キス”だけど、」

「む、むむむりや！ 何やねんそれっ、男がおいそれと簡単にそんなんできるかあ！！！」

顔を真っ赤にさせて、フェイトに怒鳴る小太郎。フェイトとフェリス以外は顔を赤くさせたり、残念そうだったり、まあ様々だ。

「・・・そうですか」

「ん？ どうかしたんか、フェリス？」

「いえ、なんでもありません」

ぷい、と無表情だが何処となく不満そうに顔を逸らすフェリスにますます不思議そうに小太郎は首を傾げた。

おや、と小さく驚いたのはまだ少し頬を赤くしている栞のみで、他の面々は必死に自分を落ち着かせようとしていたり、それを手伝っていたりで気づいていない。

まだ無自覚であろうフェリスを見て、栞は何だか微笑ましくなった。

フェリスが小太郎に好意を抱くと困ってしまう人もいるだろうけど、それはそれだ。栞はどちらも応援するつもりである。

栞自身フェイトが好きなのだが、焰達の思いもわかってるし、いつそハーレムエンドの方が皆幸せでいいじゃないかと思ってるので、小太郎の方もどちらにも恋人にしちゃえばいい、と考えているのである。

「まあ、他の儀式魔法がないわけじゃないから、それをするとしよう」
「う」

「おう、そうしてくれ」

まだ引かない頬の赤みを隠すように顔を机に突っ伏し、小太郎は弱弱しくそう言った。

9・・・じい（後書き）

あとがきという名の言い訳。

読んでくださりありがとうございます！

あ、オリジナルな名前の由来ですが。
フェイトにちょっと被らせようかと思つて、イタリア語やラテン語の運命つて意味の単語を調べたんですが微妙だったので、“フゝ”、
というフから始まる名前にしました。

イタリア語の felice、フェリーチエを英語読みしてフェリス
です。意味は幸運。語源はラテン語らしいです。
フェリシアと悩んだんですが。正直、愛称シアって可愛いし。
ちなみに、ラテン語で fine、フィーネ、意味：終わり、にしよ
うかとも思いました。

悩んだ結果フェリスという名前になりました。

100…じゅっぱっ(前書き)

何度も書き直したのですが。むづ。難しいです。

100・しゅっぱい

ある日の会話。

組み手の訓練中、派手に飛ばされた調達を小太郎とフェリスが共に座って眺めていた。

突然、フェイトが小太郎とフェリスの方に振り返り、それとほぼ同時に小太郎とフェリスも後ろに振り向いた。小太郎より後方に少女とローブを羽織った性別がよくわからない小柄な人がいた。

一瞬で現れた2人。恐らくは長距離転移だろう。だから、気づかなかった。それが出来るということは、かなりの使い手だということだ。間近にいて少ししか感じられない気配が2人が強いという事を裏付けていた。

「・・・貴方がここに来るのは珍しいね。“墓所の主”」

「何、少しな。フェイト以外ははじめましてかのう？」

ローブの方の人物がそう答える。

フェイトに呼ばれた方はどうやら、ローブの方らしい。

「1人2人がかまわん。今すぐではないが・・・そうじゃな、後数ヶ月したら、長期任務に出て欲しいのじゃが」

「長期任務？」

「そう、期限はわからん。短ければすぐに終わるし、長引いても、1、2年じゃ」

「いったい何を？」

「・・・計画は大分進んでおる。故に、現実世界へ行つて欲しい。黄昏の姫巫女の所在の探索と、我等が主の封印地確認のために」

「なるほどね、わかった」

フエイトは頷いた。飛ばされた調達が戻ってきて、不思議そうにするのを見て、後で説明すると告げる。

「ようやく、終わりが見えてきたの・・・」

小さく呟かれた言葉に小太郎はふとローブの人物を見る。ローブで隠されていない口元だけが、“墓守の主”が笑っている事を教えていた。

小太郎がフェイトと出会って、約3年。正確にはわからないが、おそらく6才だった小太郎が10才程度になっっているのは、ダイオラマ魔球を使用する事も多々あったからだ。栞達は小太郎より1つ下だったのだが、今では同じくらいの年だ。今はもう栞達も任務に出ているのだが、最初の頃は：フェイトについて行っていたのだとはいえ：小太郎は任務に出ていたが栞達は出ていなかった。その間のダイオラマ魔球での修行により、年齢が追いついたのだ。

「じゃあ、そろそろ行くわ」

魔法世界と現実世界を結ぶゲート。

小太郎は、フェリスと共にこれから現実世界に行く。目的は主に“黄昏の姫御子”や“魔法使い”達の情報収集、それに“造物主”の所在の確認だ。

フェイト達“完全なる世界”の計画は着々と進んでいる。後1年内、遅くとも数年内で、最終段階に入る予定だ。黄昏の姫御子が見つからなくとも、造物主の封印さえ何とかなれば計画は達成できる。その封印を何とかするのが、黄昏の姫御子がいなければ難しいのだが、出来ない事はない。

「彼方と此方では色々違うから気を付けてね」

「わかつとる。・・・嬢ちゃんらに年抜かされるんは癪やけどしやあないわ」

ダイオラマ魔球がある。栞達はそれを使い力の研鑽をするだろうか
ら、確実に年は抜かれるだろう。

「彼女達が。行きたがっている子もいたけど」

「言っとつたな、そーいや。でも、なあ。嬢ちゃんら、あっちにい
けんし。弱いわげやないけど、俺よりは弱いし」

彼女達は十分強くなっている。並の人間では、敵わないくらい強く。
任務にだって出るようになってる。しかし、現実世界に向かうの
は難しい。行けたとしても不安要素は大きい。彼女達は生粋の魔法
世界の住人だからだ。

小太郎達が向かう場所には現実世界での魔法使い達の活動拠点も多
くあるのだ。

正直に言えば、小太郎もフェリスも色々と不安はあるのだが。ただ、
何かあってもどうにか出来るだけの實力があるだろうと判断されて
いるのである。

「準備完了しました」

「おう、じゃあ」

「じゃあね」

魔方阵が、ゲートが光る。
一瞬の後、2人の姿は消えていた。

100・しゅっぱつ(後書き)

あとがきという名の言い訳。

とりあえずは、魔法世界から現実世界にいつていただきました。
修学旅行編は、小太郎達2人がネギ達の敵役です。
ネギが勝てる気がしな・・・、どうなるんでしょう？

読んでくださりありがとうございます。

設定？（前書き）

蛇足かなとも思いましたが、キャラ設定です。今回は小太郎とフェリス。

パート？があるかは未定。

あまり、小太郎らしくないアーティファクトかもしれません。名前は・・・orz。

設定？

犬上小太郎

見た目10歳程度の影使いの少年。狗族と人間とのハーフ。実際の年齢は不明。

初めての友達であるフェイトの助けをしないと魔法世界についてきた。魔法世界を見て回った今は、フェイトの手伝いじゃなく自分の意志で“完全なる世界”の計画を成功させたいと思ってる。

女の子に攻撃するのは性格的に嫌ってのもあるが、トラウマで出来なかつた。今でも苦手だが、相手が強ければ戦える。

普段は年相応に子供らしいが、たまにそうでもない。妙に諦観した所があつたりなかつたり。

能力について。

忍術：多少使える。分身とか、影分身とか。

陰陽術：基本使えない。ただし、符さえ用意されてたら符術の行使は出来る。

魔法：使えない。元々気の使い手だったため魔力が上手く扱えず断念。

操影術：狗神、転移、飛行含め色々な補助が可能。

独学だけでなく、フェイト達との鍛練があるので原作の現段階よりは数段強いです。気の練度も相当ですが、原作ほど陰陽術などの小技は使えません。火出したりとか。

パクティオーカード

称号：鎖の切れた狗

徳性：勇氣 (audacia)

方位：中央 (centrum)

星辰性：火星 (Mars)

色調：黒 (nigror)

アーティファクト

名前：斬影刀

簡単な説明。

- ・前提条件として影使いでなければこのアーティファクトは出ない。
- ・影を実体化して出来ており、影と同化でき影から取り出せる。
- ・従者に合わせて出現する武器の形が変わる。
- ・武器の形は変わるが、必ず“切る”系統の武器である。
- ・時には名前の通り刀の形だった事もあるらしい。
- ・小太郎の場合は黒色のクナイであり、最大で5本出せる。
- ・遠くへ行ってしまうても影から呼び戻せる。
- ・普段は実体化しているが実体のない影に戻せるので、物質を透過する事が可能。
- ・つまり、切る切らないを選らべる。

小太郎的には特訓の時、相手を傷つけずに済むので結構このアーティファクトを気にしているらしい。

フェリス・アーウェルンクス

本名というか番号は6番目。セクストゥム水のアーウェルンクス。フェリスの命名は栞達と小太郎。

予想外の目覚めだったため、調整を行ったのだが戦闘面以外でのパラメータが微妙だった。しかし、最近は色々学習してきている。

栞達からは妹分のように扱われている時もある。まんざらでもない。小太郎の仮契約の主人であり、自覚はしていないが小太郎に少なからず好意を寄せている。

本作のヒロインの1人。

設定？（後書き）

あとがきという名の言い訳。

センスが欲しいと思いました。アーティファクトの設定なんて、思い付かないよ・・・っ。
仮契約カードの属性云々は一応調べながら考えたのですが、合っているのが不安です。

読んでくださりありがとうございました！

11：刀（前書き）

新しく原作キャラ登場！
口調が難しいです。

ある日の会話。

「全然、情報ないなあ」

「やはり、直接麻帆良に行く方がいいのでは？」

「それはそうなんやけど、麻帆良は結界がすごいやんか。結界頼りに見えてそれだけでもないし。何のつてもないんやで？ 今すぐに行くんは無理やろ。なんか策考えな」

「確かに。策は私が考えておきましょう」

「おう。さて、なら、行くか」

「何をするつもりですか？」

「策考えたり準備するんに時間かかるやろ。それまでの暇つぶし兼ちよつとした情報収集や。やっぱ、こういうんはあれや、蛇へびの道みちは蛇へび言いつからな。裏でテキストに仕事受け取ったら情報は入ってくるやろ。金も稼げるし」

にやり、人の悪い笑みで小太郎は笑った。

小太郎達は今現在、裏からの依頼を受け活動中である。仕事は選んできたので、今までいくつかこなした仕事は全て殺しなどない、それなりに真つ当なものばかりだ。

「つまらんなあ、ただの護衛やん」

ふわあ、と欠伸を1つ。

今のところは順調すぎるくらいに順調に進んでいる。目的地まで、大分近づいている。もう大丈夫、と油断してしまう頃だろうから、油断しないよう注意しなければ。

小太郎達が護衛するものは妖刀を運ぶ為の車と人だ。山の中を走るトラックの荷台に小太郎とフェリスは乗っている。

妖刀は守りたいが金も人もあまり使いたくない、から自分の所の人間をほとんど使わずしかも雇うのも最小限、というのは、もしものことがあったらどうするんだ、アホじゃないか、とぼんやり思いながら、小太郎は遠くを見やる。影も形も見えないほど遠くに、先ほどこから人がいるのだ。

「・・・、大分遠くやけど、追われとるな。いや、追いつこうとしとるんか？」

「はい、ですが、どれも裏の人間のように思えません」

「金で雇われたゴロツキいうところやるな」

影から狗神を数匹出す。そこらのゴロツキならば、この程度で十分追っ払えるだろう。わざわざ行くまでもないし、恐らくこのゴロツキは困なのだ。

護衛を車から離すための。

狗神だけで簡単に追い払えたようだ。すぐに戻ってきた狗神を影に戻す。

「どうやら、奴さん（こいつ）、良い人ではなさそうやなあ」

ぴりぴりと、殺気がどこからかする。

うまくいかなかった囷は諦めてわざわざ出向いてくれたのだろうか。その割には、殺気の人物の注意は妖刀よりも自分達と戦う事に向いている気がする。妖刀だけが重要なら、盗めばいい。護衛を必ず倒す必要性などないというのに。

とん、軽い音と共に、トラックの上、だいたい運転席の真上のあたりに少女が1人降り立った。白いローリータ服に身を包んだ少女は持っていた刀を降り立った勢いそのままに下へ突き、運転席の人物を殺そうとした。ご、という音が響く。運転手の頭上で刀は氷に阻まれる。方法までは予想していなかっただろうが、止められる事は予想していたらしい、少女は笑った。笑って、小太郎とフェリスに攻撃を加え、2人を荷台から降ろした。焦ったようにアクセル全開で

去っていく車は無視で、少女は2人ににこにここと笑いかける。

「うふ、うふふふ。可愛らしい御嬢さんに、これまた可愛らしい坊ちゃんやありませんの。今回の仕事は外れやと思うとりましたわあ、そんな事ありまへんでしたわあ」

「誰が、可愛らしいっちゅうねん！」

「小太郎、今はそんな事を気にする場面ではないでしょう」

「うぐ、やって・・・っ」

「うふふふふ」

微笑む少女は可憐だった。だが、小太郎だからこそわかるくらいの微量の血の匂い、その洗っても落ちる事はないだろう匂いが、その外見に騙されてはならないと警告する。隙はありそうに見えて、ない。彼女は強い、そう小太郎とフェリスは認識する。小太郎は未だに女子供に手を出すのに少しばかり抵抗感があるが、しかし、自分と同等かそれ以上に強いのであれば別である。

「何や、姉ちゃん雇われか」

「はい。あんさんらも同じですよ？」

「妖刀が目当てなんやったら俺らの相手しとっていいんか？」

「これ言うたら、雇い主さんに怒られてしまいそうやけど。うちはただの囃第2弾やから、あんさんらの相手しとるんが仕事です」

別に雇い主が目的を達成しようと、しなかるうと、どうでもいいの
だろう。あっさりとその口にする。

小太郎とフェリスは目配せをし、一瞬でフェリスがその場から消えた。車を追って行ったのだ。正直、妖刀がどうなるうとどうでもいいが、仕事は仕事だ。

「あ〜ん。うち、どうせやったら可愛らしい御嬢さんの方とやりたかったです」

「はん、残念やったな。姉ちゃん」

「ま、ええです。坊ちゃんでも十分楽しめそうやし」

「坊ちゃんは止めてくれんか。俺には犬上小太郎言う名前があんねん」

「ご丁寧にどうも。うちは月詠います。小太郎はん」

言うてから、月詠は、すらり、二刀の刀を抜き、構える。それを見て、小太郎も構えた。

殺気が周りに充満していく。

「神明流剣士、月詠、参らせてもらいます」

「上等や!」

「・・・で、何がどうなったのですか?」

「な、なんや怖いんですけど。ふえりすサン?」

「あらら? そないに怒らんでもええですよん」

戦闘の結果、小太郎はなんとか勝った。といつてもお互い隠し玉は使っていない。全力ではあったが本気ではなかったのだ。一応、決着はついたが、まだお互い動けるのに月詠は給金分の仕事は終わった。ただと言つて、それ以上戦闘をしようとも雇い主の所に戻ろうともしなかった。

小太郎が自分の手当をし終わった後も、手当もせずになにこにことしている月詠に、いい加減耐えられず仕方なく小太郎は月詠の手当てをする事にしたのだ。そしてその手当が終わる頃に、依頼を完了させたフェリスが帰ってきたのだ。

「うふふ。何や、うち、小太郎はんの事気に入ってしまいましたわあ」

そう言って去って行った月詠に、フェリスは静かにキレたのだった。

11: 刀（後書き）

あとがきという名の言い訳。

タイトル変えてみました。とりあえず、暫くは漢字1文字です。

小太郎達は仕事始めました。まだそんなにしてません。そしてまだ麻帆良には行きません。話の都ご、げっふん。

さて。そんな訳で月詠登場！ タイトルの刀は妖刀よりも月詠さんイメージだったり。

かなり好きなキャラなのですが、口調が難しいです。正直、上手く書けてる気がしないです。

あ、あと、彼女はヒロインにはならないと思います。仲良くはなりません。

読んでくださりありがとうございます。

12:報(前書き)

相変わらず捏造しています。

ある日の会話。

環に小太郎、それに栞という組み合わせで任務に出た時。

「そういえば、何でコタローは学ランなんだ」

「なんや、すごい、いまさらな質問やなあ」

「私も気になりますわ」

「うーん。昔、フェイトと会うちよいと前やったかな。たまたま仕事の報酬が現物支給でな。食べ物やら何やら色々と貰った中であつてん。で、着てみたらなんや気に入ったんや。夏用やったら、まあまあ涼しいし、冬用やったら暖とれるしでけっこう実用性高いしな」

「ほう、実用性。フェイト様やフェリスも実用性が高いからあの恰好なのか？」

「・・・それはどうやろ？ あいつら、暑いも寒いも関係ないつうか気にせんやろ。もしかしたら、」

誰かさんの趣味なんかもしれんが。

小太郎の飲み込んだ言葉を察して、曆は無表情で、栞はただ笑うだけ、何も言わなかった。

とある宿の部屋の中。窓際の椅子に2人は向かい合って座っていた。

「うーん。まあまあ情報は集まってきたけど、肝心の姫ひめさんの情報は全然あらへんなあ」

「ですが、色々とわかってきています。元から知っていた事もあります。関西から関東へと渡った1人娘。同盟を結ぼうとしている事。まあ、元々トップは義理とはいえ親子です。長年の仲違いをどうにかしようとはするでしょうね。ただ、関東はまだしも関西の下は納得していません」

「それを抑えられるかどうか。無理やるなあ、サムライマスターは腕は一流でもそれは戦士としてや。親としての情を優先しとるとこ見ると、上として優秀とは思えへん」

小太郎自身は、頭を使うのが苦手だと自負しているが、しかし、フエイトによってある程度の頭の使い方は学んでいる。それなりに、

あくまでそれなりにだが、情報から読み取れる事があるのだ。
グラスに注がれた牛乳を飲んで喉を潤してから、小太郎は再び口を
開いた。

「関西の姫ひめさんが入つとるクラスの担任は高畑ゆうおっさんやった。
けど、それは最近変わったちゅう事やったよな」

「はい。詳しくはまだ探れていませんが、並大抵の者では関西へ顔
向け出来ない筈。フェイトに尋ねてみたのですが、どうやら、その
人物について彼方では機密らしく隠されているようです。今の我々
ではまだ目立つた動きが取れませんので・・・」

「時間がかかる、か。あ、月詠が言うには、そのクラスの担任が特
使で来るらしいで」

月詠とはあれから度々、顔を会わせていた。どうやら本当に気に入ら
れたらしい。

自分と同じ戦闘狂というには月詠は少し狂気が強いが、小太郎は月
詠の戦うのが楽しいという気持ちがかくわからない訳ではない。一
歩間違えれば、小太郎は身に流れる妖怪の血の衝動によって、月詠
と同じ場所にいたのかもしれないのだ。混ざり者である分、血を抑
える精神が普通の妖怪より弱い。

精神的にも強くなった今ならば、あり得ない。しかし、あり得たか
もしれない事だった。

そして、多分、だが。月詠が自身の狂気を抑えようと頑張っていれ
ば、小太郎くらいの戦闘狂であったのかもしれない、と小太郎は思
っている。

少し違えば小太郎は月詠であり、少し違えば月詠は小太郎であったのだろう。
恐らく、月詠が小太郎を気に入ったのは、そして小太郎が月詠と交流を持てるのは、互いに対する共感からだ。

それをきちんと理解している訳ではないだろうが、フェリスも何となく感じとり、小太郎と月詠の、曖昧な友達関係に何も言わなくなっていた。

それはさておき
閑話休題。

小太郎の月詠から、という言葉に、フェリスは反応した。

「月詠から、ですか」

「おう」

「月詠は誰から聞いたのですか？」

フェリスの問いに小太郎は首を傾げ考え、答える。

「誰からかは聞いとらんから、知らへんわ」

「・・・月詠に、連絡は取れますか？」

「取れるけど、何でや？」

「恐らく、ですが。何らかの依頼を受けて、情報を得たのでしよう。もしかしたら、サムライマスターが抑えきれなかった部下の誰かが、反旗を翻す為に月詠を雇ったのかもしれない」

「もしそうなら、上手く俺らもその話に加わってくつもりか？」

「はい。手っ取り早く関東の方の情報を得られるかもしれないですよっ。」

「そうやな。そういや、麻帆良の件についてはどないなってるの？」

「策は出来ています。準備についてはフェイト達に任せていますが、・・・あと少しかかるでしょうね」

この時はまさか、喉から手が出るほど欲っている人物を発見するキツカケになるとは露とも思わぬまま、2人は月詠に連絡を取ったのだった。

12：報（後書き）

あとがきという名の言い訳。

報は報告とか情報とか知らせの意味です。

月詠と小太郎は何か妙な友情を築いています。まだ出会ってそんなに経ってないのに結構頻繁に連絡を取り合っています。

そういえば、実際の小太郎ってどのくらいの頭の良さなのか微妙に気になってます。ある程度の良さそうではあるけど学校に行ってなかったばいし。

このお話の小太郎はフェイト達によって叩き込まれたので原作よりも知識豊富だったりします。フェイト達の努力の結果です。

読んでくださりありがとうございました。

13：罽（前書き）

注意

無い知恵しぼって考えました。矛盾点などあるかもしれません。捏造設定です。

ある日の会話。

それは、何年も昔の話。
少女は泣いていた。

「うう・・・ひつ、く・・・ふえ、」

写真立を見ながら、少女は泣いていた。
滲んだ視界では見えない、明るい普通の家族の写真。真ん中には今より少し幼い少女が写っている。

「なん、で・・・、うう、なんで、せいよー魔法使いらの、うう、
争いなんてうちらには、かんけつ、ないのに・・・っ」

ぎゅう、と写真立を胸に抱く。
涙は止まらない。

「、絶対に絶対に許さへん」

いつか必ず、復讐してやる。そう少女は写真に写る両親に告げた。黒い希望を胸に抱く事ではか、悲しみから耐えられなかった少女は涙を流しながら誓ったのだ。

雇い主の簡単な説明を月詠から聞きながら、小太郎とフェリスは月詠の後ろについて歩く。

何でも、雇い主もまだ部下が欲しくどうしようか悩んでいたらしい。そこに小太郎に頼まれた月詠が小太郎達を紹介してきたわけだ。

「復讐なあ」

「はい、なんでも両親の仇、らしいですえ」

「まあ、わからなくてもないけど」

20年前の大戦。大戦自体は魔法世界で起きた事だ。陰陽師や神鳴流剣士達には本来関係ないその大戦。言ってしまうと、とぼつちりを受けたようなものなのだ。

確かに、関東魔法協会設立により陰陽師達は関西へと追いやられた

事から、陰陽師達は魔法使い達についてよい印象を持っていなかった。

しかし、時が経つにつれ、悪く思わない者達も増えていた。特に若者はそうで中には魔法世界に赴く者達もいたのだ。

けれど、突然魔法世界に大戦が起きた。当然、関西呪術協会は関東魔法協会に魔法世界にいる陰陽師達の救援を要請した。しかし、関東魔法協会は魔法世界に避難や保護要請を出してくれたが、それだけだった。関東魔法協会にまで大戦の火の粉が来る事を避けたのだ。ゲートを全て閉じると魔法世界と現実世界との時間軸がずれていってしまうので、全てのゲートを閉じる事は無理だ。陰陽師達の中には魔法使いは当てにならないと魔法世界に行く者達も現れたが、行った人達全員が戻ってくるのは叶わなかった。

そして、大戦後、命辛々に戻ってきた人達は魔法世界での事を話した。曰く、救援など殆どなかったと。陰陽師達は後回しだったと。魔法使い達は異郷の者よりも同郷の者の救援を優先したのだと。

関東側は仕方なかったと言うだろう。我々達には本国に要請をするしか出来なかった。魔法使い達の対応も戦時中では仕方がなかったのだと。

しかし、それで、関西側は納得出来なかった。被害が出たのだ。救援に力を入れてくれていたのなら、被害が出ていてもまだ納得できたかもしれない。しかし、実際は違った。話を聞けば、魔法使い達は救援をおざなりにしていたようではないか。

元々、魔法使いに対して心象が悪かった者は更に悪くさせ、そうでなかった者達も嫌うようになった。

自分達に一切関係のないのに巻き込まれ、身内や大切な人を亡くした者達の中には、復讐を望む人も出てくるだろう。

「うふふ、小太郎はんなら、きっと千草はんを気にいりますえ。あの人、少しばかりおっちょこちょいで、犠牲に関しては最小限に抑えたいゆう甘ちゃんのようにですが、全てを捨てる覚悟を持ってはるようですから」

「ふうん、月詠がそう言うっちゆう事は、下種や外道の類やないんやな」

「ええ。いざって時は外道になる決意も持ってはるようでしたが、元からの下種や外道ではないですえ」

細い山道を歩いていると、ふと月詠が止まった。後ろに続いていた2人も止まる。

ここより、先に進めば、結界の中に入るのだろう。前方に広がる景色に奇妙な違和感があった。

くるり、と月詠は身体ごと振り返った。ふわり、とレースの付いたスカートが舞う。

「さて、小太郎はん、フェリスはん。ここより先に、うちの雇い主、天ヶ崎千草はんがいらはります。御覚悟は？」

月詠の口角が上がる。細められた瞳は、眼光鋭く。小心者なら吞まれてしまいそうな空気を作り出す。
そんな月詠に小太郎は呆れたように息を吐き、フェリスは少し目を細めた。

「あーのーなあー、月詠」

「月詠、ふざけないでください」

「うふふふ、ちょっとした冗談ですやんか。さ、参りましょ」

一歩、踏み出せば、景色が変わった。無かったはずの小屋が表れていた。

小屋の中には和服に身を包んだ眼鏡の女性がいた。

座する女性の後ろには女性を守るように、力のこもったやたらとフアンシーなきぐるみのような熊と猿がいる。

「千草はん、連れてきましたえ」

「おおきに、月詠はん」

月詠が千草の近くに控える。

小太郎とフェリスは千草の前に並んで座った。

「あんさんらが、犬上小太郎はんとフェリスはんでよろしいおすか？」

「おお、そつや」

「さて、ほんなら。あんさんらに依頼があるんやけど、内容聞いて、やっぱ無理、とかは此方が無理どす。内容聞く前に、あんさんらが絶対裏切らへんゆう確証がうちには欲しい」

「今まで俺らは依頼を反故にした事ないで」

「多少は調べさせてもらいましたから、実績くらいは知ってます。けれど、あんさんらが今までしてきた仕事は割と真つ当なものばかり。此方の依頼を受けへんかもしれん」

「なんや、真つ当なもんやない？」

実際は月詠に聞いて少しばかりというか、概要は知らずとも動機は知っているのだがそれを億尾にも出さずに小太郎は言う。言葉に千草は笑って見せた。

「復讐や、真つ当なもんな筈がない」

千草は笑みで肯定し、さらに言葉にした。声は何処までも冷たく重い。宿るは怨嗟の念。瞳には20年も積りに積もった恨み辛みと、復讐に対する覚悟が。

彼女は止まらないだろう。如何に手駒が少なくとも、如何に手札が

限られていても、可能性のないような作戦だろうと、彼女は止まらないだろう。

「かまへんよ」

「ええ。Ms・天ヶ崎。貴方の依頼受けましょう。報酬はそれ程いりません。ただ、ある程度の条件を呑んでもらいますが」

きつと、彼女は貫く。成功するか否かはわからないが、彼女は彼女の意志を貫こうとするだろう。誰にとっても間違いで、悲しみと憎しみしか生まなくとも。

本来ならば、普通ならば、正すべきだろうその誓いを、しかし小太郎は見届けたくなったのだ。

13：誓（後書き）

あとがきという名の言い訳。

千草さん登場！

京都言葉なんてわからない・・・。

大戦などのところは必死に考えたのです。一応。
明かされていないので、実際のところはどうだかわかりませんが。
このお話ではこういう設定でいかせてもらいます。

読んでくださりありがとうございました！

14：尾（前書き）

無い知恵、以下略。
捏造設定です。

ある日の会話。

「コタさんとフェリスちゃん、今頃、どうしてるかな？」

「さあな。だが大丈夫だろう。2人とも強いからなっ、と、チエック」

「うっ、うーんと、これでどうだっ」

「で、チエックメイト」

「うにゃあっ」

「暦は相変わらず弱いですわね」

「私が弱いんじゃないって焰が強いのっ」

「・・・」

「環、無言で肩叩かなくていいよ！ 慰めなんてっ」

「いや、いい加減諦めろ、と」

「慰めですらないんかっ！」

「きやーきやー」。

「口調崩れてるぞ、曆」

「でも、確かに、私達の中で一番弱いのは曆ですわ」

「たまには勝つ事もありますよ。曆も」

ほとんど曆は負ける、と言っているのと同じでは、と思ったが栞は調に言わなかった。

ちなみに小太郎は頭を使うのが苦手だと言っている割に強かったりする。

小太郎達がいくつかの条件を提示し、それを千草が呑み、契約完了した後。

資料を渡され、説明された作戦に、随分と無茶な作戦をたてるものだと思っただと小太郎は思った。

「親書の妨害ならびに関西の姫君の誘拐ですか。関西呪術協会のお膝元で、この人数で」

フェリスが尋ねる。

千草はどうだか知らないが、自分達はもちろん、月詠も強いとフェリスは知っている。

だが、フェリスは今回の依頼でアーウェルックスを知る者と接触してしまうかもしれず、その容姿からフェリスはあまり目立つ訳にはいかない。条件として、フェリスは基本表立って出ない事になっている。そして、月詠は如何に戦闘を楽しめるかが重要なので戦う相手がある程度の実力ならばその実力に合わせて戦う事が多い。小太郎はそうしても依頼遂行可能ならば月詠と同じような行動を取る事が多い。戦闘馬鹿だから。戦力はあるが、制限があるのだ。まあ、多少の制限があっても、成功する確率が無いわけではないのだが。

「出来る出来へんは関係ありません。やるんどす」

「ふふ、うち、千草はんのそういうところは好きです」

「そうですね。しかし、この最初の方のカエルなどはどんな意図が？」

「ああ、それな。うちは、彼方をな、狸や狐やと思つとるんよ。言葉通り魔法先生が1人とは思えへんし、先生がおらんでも裏関係の生徒はおるかもしれん。否、おると思つといた方がええ。なら、その人数ないし、タイプは知つとかと」

「探りを入れる為ですか。主に特使の魔法先生の實力を、でしょうが、上手くいくかわかりませんよ」

「まあ、それで全部探れるとは思ってらんよ。やから、メインはフエリスはんが言った通り特使の實力の探りや。それで新書を奪えるなら、それでええ。相手を傷つける訳やないし、デメリットは精々警戒されるくらいや。けど、警戒自体は元々されとるはずやから、大きいデメリットやないやろ？」

まさか、警戒をしていないはずがないのだ。その度合いが上がった所で、どうなる訳でもない。多少のちよっかいで、修学旅行が中止になる筈がないのだから。多少、目的達成が困難になるだけだ。

「なあ、千草の姉ちゃん」

フエリスと千草の会話を聞いていた小太郎がふと千草の名を呼んだ。

「リヨウメンスクナの封印解除に成功して、それでどうするつもりなん？」

「どうするって、関東の奴等を追い出すんや」

「リヨウメンスクナを呼び出して、それでどうやって追い出すんや？ 麻帆良まで持っていく訳にもいかんやろ。魔法は秘匿せなあかんもんなんやから」

「簡単やよ。アイツらは“正義”なんてうすら寒いもんを背負ってる。リヨウメンスクナなんてもんを特使がやってくる時に呼び出せば、勝手に向こうからわんさか現れる。関西が要請せんでも首を突っ込むかもしれへんな。しかも、スクナの為に利用されとるんは理事の孫でもある存在や。尚更やる。わざわざ修学旅行に紛れて特使をよこして、木乃香お嬢様の護衛がままならん状態にしたんは向こうやしなあ」

魔力の高い者ならばいい所をわざわざ木乃香を使うのはその為だ。木乃香は極東一の魔力の持ち主だが、別に絶対それだけの魔力が必要な訳ではない。例えば、フェリス魔力電池として利用しても出来る事には出来るのだ。

「全滅は無理やろうけど、関東の力を落とすんは出来る」

そう、弱らせる事は出来るだろう。

日本内での揉め事に本国や他国の魔法使いに介入されると面倒な事になる、下手をすれば日本を本国などの支配下のようにしてしまうかもしれない。だから関東は出来るだけ介入させないように内輪で解決出来るようする筈だ。

関東魔法協会を弱らせられれば、それから関西呪術協会が上手くやれば。

関東関西関係なく日本は魔法使いではなく陰陽師の土地になる。そうはならなくとも今よりも陰陽師側が有利になるはずだ。

預けられていたお姫様を、安全であると言い切れないとわかっていて、特使と共に修学旅行で京都によこしたのは関東だ。別に特使を

よこすのに、絶対修学旅行中でなければいけない訳ではなかったのに。だから、たとえお姫様が攫われたとして、落ち度は関東にもあるのだ。

千草は確かに関西の者だが、所詮末端。下っぱだ。離反者であり、他の仲間は雇われ者。関東を弱らせた後に千草だけでも関西に捕まれば良い。失敗しても、同じく捕まっつてしまえば良い。

千草には千草1人が考え実行したと言えただけの動機がある。失敗しても成功しても捕まれば、尻尾切りはそれで完了だ。

「・・・何や、千草の姉ちゃんの後ろは、誰ぞおるんか」

「はて、何の事やら。無い裏探られてもなあ。まあ、1つ言える事は、たとえ尻尾でも、尻尾になれた事は感謝しとるって事や」

そう言っつて千草は笑った。

14：尾（後書き）

あとがきという名の言い訳。

無い知恵しぼったよ！

でも、無い知恵なんだよお・・・。

正直、千草さん以外に雇われってどうなんだろう、仲間に1人くらい陰陽師や剣士で復讐誓ってる人いてもよかつたんでは。まあ、漫画の都合上仕方ないのだろうけれど、とか。リョウメンスクナを呼び出してどうするつもりだったんだろう、とか。思いつつ必死に考えました。

色々考えられる賢さが欲しいです。

ちなみにフェリスはアーウェルクスと名乗っていない設定だったりします。バレないように。

文中で表現出来るようになりたいです。

読んでくださりありがとうございました！

15：謎（前書き）

まさかのあのキャラが登場？

相変わらず捏造設定がたくさんです。

あ、そういうば。ヒロイン案の事ですが、原作に入っているのでもろろ締め切らせて頂こうと思います。案下さった方は本当にありがとうございます。

15：謎

ある日の会話。

どきどき、

どきどき、

胸が高鳴る。

可笑しいなあ、私、男の人が苦手なはずなのに。先生を見ると、先生の事を考えると、苦手だからとかそれだけじゃない緊張がある。

「のどか、どうかしたですか？」

「ん、あのねー」

不思議そうに尋ねてきた夕映に訳を話す。

どきどき、この胸の高鳴りの理由を知らないままでもいいような。知りたいような。

そんな曖昧な思いも全部夕映に話した。

「そっ、それは、本当にですか？」

「うん。一体なんなのかなー」

「のどか、それはですね、きつと」

続く夕映の言葉に驚いて。けれど、同時に納得する。

どきどき、

どきどき、

ああ、なるほど。

これが恋なんだ。

「あほくさ」

耳を隠すために被ったニット帽を弄りながら、ぼつり、と小太郎は思わず呟いた。

今小太郎は千草の命により、清水寺で特使率いる3年A組の様子を離れた位置から見ているのだが、その様子に思わず呟いてしまったのだ。しかし、辺りに聞こえるような声の大きさではない。そこまでの愚は犯さない。

「ほんまに、あんなんが特使なんか。魔法使いとしてもアレちゃうか？ あんな堂々杖持つとるし。あんたはどう思う？」

一人でいたはずの小太郎の問いかけに反応する者がいた。すぐそばにいなければ聞こえない程に小さい声だったというのだ。

小太郎の隣にいつの間にか現れていた、その人物は無表情を貫いたまま、口を開いた。

「よく、気づきましたね」

「姉ちゃんの見た目には、覚えがあつたさかい。あんた、“墓所の主”と一緒にあつた姉ちゃんにそっくりや。そんなん、偶然なはずないやろ。という事はや、普通の人間やないゆう事やし、もしかしたら俺の事知つとるかもしれへん。接触してくるかも、って少しやけど思つとつたんや」

「なるほど。姉さんに会つた事があるわけですか」

「“姉さん”ね。やっぱり、俺の事、知つとるんか？」

「ええ。ある程度は知っています」

ザジ・レイニーデイ。もしもA組の生徒がこの現場をみたら驚くだろつ。

彼女はクラスで滅多に喋らない。一言も声を聞いた事がない者がほとんどだ。

小太郎とザジはお互い、前を向いたまま、横を向かず相手と向き合わずに会話をする。

傍目には修学旅行中の学生2名だろうし、人払いの結界は張ってはいないが認識阻害の結界をザジがかけたのを小太郎は気づいていた、というかザジが気づかせたのだろうが、まあ気付いたので、小声のままだが、何ら気にする事無く喋る。

「何で、姉ちゃんがおるんか聞いてもかまわんか？」

「ええ。私が麻帆良にいるのは、分岐点の観測およびに貴殿方の主の存在確認の為です。後は、可能性の観察ですかね」

「・・・ようわからんわ」

ザジは小太郎の返答に瞬き1つして、特に気にした風でもなく、貴方は、と小太郎に問い返した。

「情報収集、やな。姫さんや麻帆良の・・・聞いて答えてくれると楽できて嬉しいんやけど」

「お答えする事は出来ないでしょうね。全部とは言いませんが」

「契約を違えるんか？」

「私達が契約をしたのは貴殿方ではなく、造物主です。お忘れなく。そして、“完全なる世界”には既に姉さんが派遣されています。貴

方が私の協力を強制する事はできません」

「ふうん。まあダメ元やったからええけど」

きやーきやーと騒がしい様子を眺めながら、小太郎はそう言った。どうやら、電車の中での時や落とし穴の時同様、簡単に引つかかってしまったらしい。酔いつぶれてしまった人が多数いるようだ。結構いい酒やのにもったいない。あ、お酒は二十歳になってからです。

「そろそろ行かなあかんのちゃう？」

「そのようですね」

す、と1歩前に出てから、ザジは振り返った。やはり、よく似ている、瓜二つだと小太郎は思う。似ていなければ、小太郎の嗅覚をもつてしても、彼女が魔族だと気づかなかったかもしれない。それほど、彼女の隠蔽能力は高い。並大抵の者では彼女が人外だとは気づけないだろう。

「貴方の名前を聞いても？」

「名前ぐらい知っとるやろ。何でまた？」

「貴方も1つの“因子”。貴方にはわからないでしょうが、今の貴方は有り得なかった可能性の貴方なんですよ。貴方という存在がどのようなバタフライ効果をもたらすのか。・・・退屈は私達のように

なモノにとつては天敵ですから。興味を引き起こしてくれた貴方に敬意を表したい、貴方自身から名前を聞きたいのです」

「・・・ぜんっぜん、まったく意味わからん」

「だろぅと思いました」

小太郎の様子に、やはり、とザジは今まで無表情だった表情を変え、くすりと笑った。

「初めまして。私は、ザジ・レイニーデイ。貴方は？」

「俺は、犬上小太郎や。ザジ姉ちゃん」

「犬上小太郎、それでは小太郎君、と。小太郎君、また」

「また、な」

恐らく彼女は今回の件には何もしてこない。フェリスには報告するが千草には報告せずとも大丈夫だろうと小太郎は思った。

15：謎（後書き）

あとがきという名の言い訳。

ザジさん登場！

小太郎はお姉さんに会った事があるので、ザジさんの方とも会話させました。

でないとか草さんに魔族いるぞと報告しかねないかなと思ひまして。

ザジさんの観測云々についてですが。教えてもらっていないはずの超さんの未来について知ってるようだったので、未来や過去を観測する立場にいる存在という事にしました。

普通の魔族とは違う設定です。

ザジさんが色々教えてくれないのは介入を出来るだけ避けるため。下手に動いて楽しくなくなるのを避けるため。そんな感じの理由です。

読んで下さりありがとうございます。

設定？（前書き）

フェイト先生の
講座。

このお話での魔法などについての設定です。捏造妄想設定です。

正直、意味わからない説明になってしまいました。すみません。

設定？

とある日のフェイト先生の魔法講座。

魔法について。

「魔法というのは技術であり、言ってしまうえば、概念なんだよ」

「概念？」

「そう。もっとわかりやすく言うと共通意識、かな」

小太郎達は首をかしげた。代表して疑問を口にした小太郎にフェイトは答える。

「魔法というものは、魔力を用いて妖精に力を行使してもらおう、そういう技術だ。けれど、妖精なんて本当にいるかどうかわからないだろう？ 妖精という存在がいるという認識があるからこそ、妖精は“いる”のさ。全ての妖精がそうではないし、実際に存在する妖精もいるだろうけどね」

「それ、おかしくないか？」

魔法が使える理由が妖精の存在のおかげだろう。魔法が使えるから、妖精がいると考えられ、妖精という存在が出来たのでは順番が逆ではないか。

「いや。そもそも、最初の魔法は、今では科学的に解明された、けれど、昔ではただ不思議な現象だった。未知というのは普通、恐怖だからね、それがどんなに荒唐無稽なものだろうが原因が必要だった。むしろ、より非現実な方が身近に恐怖を持たなくてすむ分、よかったのかもしれない」

原因を求め、恐怖をやわらげる。

たとえば、過去の日本で病が“鬼”の仕業だと考えられた事。たとえば、突然の行方不明が神隠しや取り替えっ子だと考えられた事。

目に見えないもののせいにされたり、あるいは目に見える何かのせいにしてその何かを排除したり。

「その原因として考えられたのが魔法であり、妖精なんだよ。日本の八百万の神、も似たような考えじゃないかな？ 詳しくはないけど、確か。神は“隠身”、姿の見えないモノであり、恐怖と畏敬の対象なのだそうじゃないか」

「……。そうやな、神は“畏み恐るる”ものやから」

そう、小太郎は何処か神妙そうな顔で頷いた。
フェイトは頷き、説明を続けるために口を開く。

「それで、妖精、日本では多分、神や妖怪といったものが共通認識されるようになった。不可思議な出来事は、それらに“魔力”や“気”で働きかける事で起こる、と考えられるようになった。そして、魔法という概念が出来たのさ」

「あの、フェイト様」

「何だい？ 調君」

「今では魔法というのは秘匿されるもの、つまりは隠されているものですよ。大多数の人間にとっては否定されているものです。なのに、何故、魔法は未だあるのですか？」

「有る事は証明できても、無い事は証明できないからさ」

魔法が絶対にならないとは証明できない。

だからこそ、絶対にならないと思っただけでも、何処かであつたらいいのにと人は思うのだ。

「絶対がないといいきれない。そして数多い魔法使い達は絶対に有ると認識している、という事ですか」

「そう。魔法は秘匿されるべきものだけど、たとえバレてもオコジヨですむのは、だからかもしれないね。ある程度の数の魔法使いが

いなければ、魔法は衰退するだろうから」

「なるほど」

「魔法だけじゃない。世界には共通意識によって成り立つものがある。共通意識によって生まれたものがある。たとえば、血統とか。才能や魔力の大きさは血によって左右されるだろう？ まるで、そう組み込まれているとでも、遺伝子こそが全てを支配するともいうように。そんなはずはないのに、現実は得てしてそうだ。まあもちろん、例外はあるし、魔法などの全てが全て共通意識で出来たという訳じゃあないけど」

けれど、確かに、“幻想”から生まれたものもあるのだ。

「自分だけの現実を強くもっていれば、魔法抗力は強くなり、意識を操る類いの魔法は効きづらくなる。一般人に稀に認識魔法が効きづらい人がいるのは、そういう訳だ」

まあ、つまりは自分を確り持っていて、常識的な人には認識魔法は効きにくいという事だ。

麻帆良学園ほど強い認識魔法が敷かれているところでは、抗える人間はそういないだろうが。幸か不幸かは断言しないが、いる事にはいる。

魔法無効化能力について。

「魔法無効化能力”は、魔法に内包された魔力の消去によって魔法を無効化するんだ。けれど、王家の“魔法無効化能力”は違う。王家のそれは一般的な“魔法無効化能力”ではない。王家の“魔法無効化能力”は魔力の消去ではなく、概念の書き換えで、無効化するか否かを選べるんだ」

消去は例外なく魔法を消してしまう。それが治癒などの良い結果をもたらそうが関係なく、内包された魔力を消し、魔法を無効化する。消去が魔力を消してしまう、己の意思で扱えない体質的な能力だとすれば、書き換えは己の意思で扱える能力なのだ。

「王家のそのの、魔法の消去は副次的な作用に過ぎない。本来の作用、それは概念の書き換えにより、魔法に内包された魔力を“王家の魔力”に変換する事だ。そして、魔法世界を支える魔力は“王家の魔力”」

「え、魔法世界が危機なのは魔力が枯渇しつつあるから、ですわよね？」

「何故、枯渇するんや。・・・供給がなくなつたから？」

「いや、供給が無くなつたわけじゃない。今でも“魔法無効化地帯”などで僅かながらだけ魔力が変換されているしね。魔法世界と同じで、魔法世界の住人は世界に満ちる“王家の魔力”によって支えられている。魔法世界が繁栄した結果、需要と供給が釣り合わなくなつたんだよ。・・・世界大戦は手っ取り早く大量の魔力を変

換するため、それが上手くいかなかった時、旧世界との繋がりを絶つためと、ついでに戦争を隠れ蓑に出来るだけ多くの人をリライトするために起きた」

だから、本当なら、君達は僕を憎んだって仕方ない、いいや憎むだけの理由があるんだ。

そう、少し、悲しげに苦しげにフェイトは言う。それにすぐさま全員から否定が入り、フェイトは珍しくはっきりとした笑みを見せた。

最後にリライトについて。

「リライト」。始まりにして終わりの魔法。造物主の魔法。全てを“書き直す”魔法。まあ、言ってしまうえば王家の魔法無効化能力の超強化版なんだけどね。だから、造物主がいない今、僕達が“リライト”を行うためには“黄昏の姫巫女”がいるんだ。彼女の魔法無効化能力を儀式魔法により強化して、ようやく“リライト”は行える」

以上。

設定？（後書き）

あとがきという名の言い訳。

改めてお久しぶりです。忙しくて更新が中々……。
というのはまあ置いておきまして。

すみません！

わけがわからない説明になってしまい、本当にもう……。！説明下手！

本当は の事を知って、上手く話に盛り込みたかったのですが、私の技量では無理でした。

魔法使いウィザードの語源は *w i s e* : 賢い + *- a r d* : 大いに
… する人、らしいです。

神は畏^{かしこ}みの略という説もあるそうです。

賢いのもとかしこしは恐ろしいだとかそんな意味らしい。

説明の文が下手すぎて、わかりづらいいと思います。
読んで下さりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7825r/>

コタマ！

2011年10月30日02時17分発行